

宿命に立つ日支関係

特 248
452



0010166-000

特 248-452

宿命に立つ日支関係

松本忠雄・著

第百書房

昭和 11

ABJ

特 248

452

宿命之因果關係

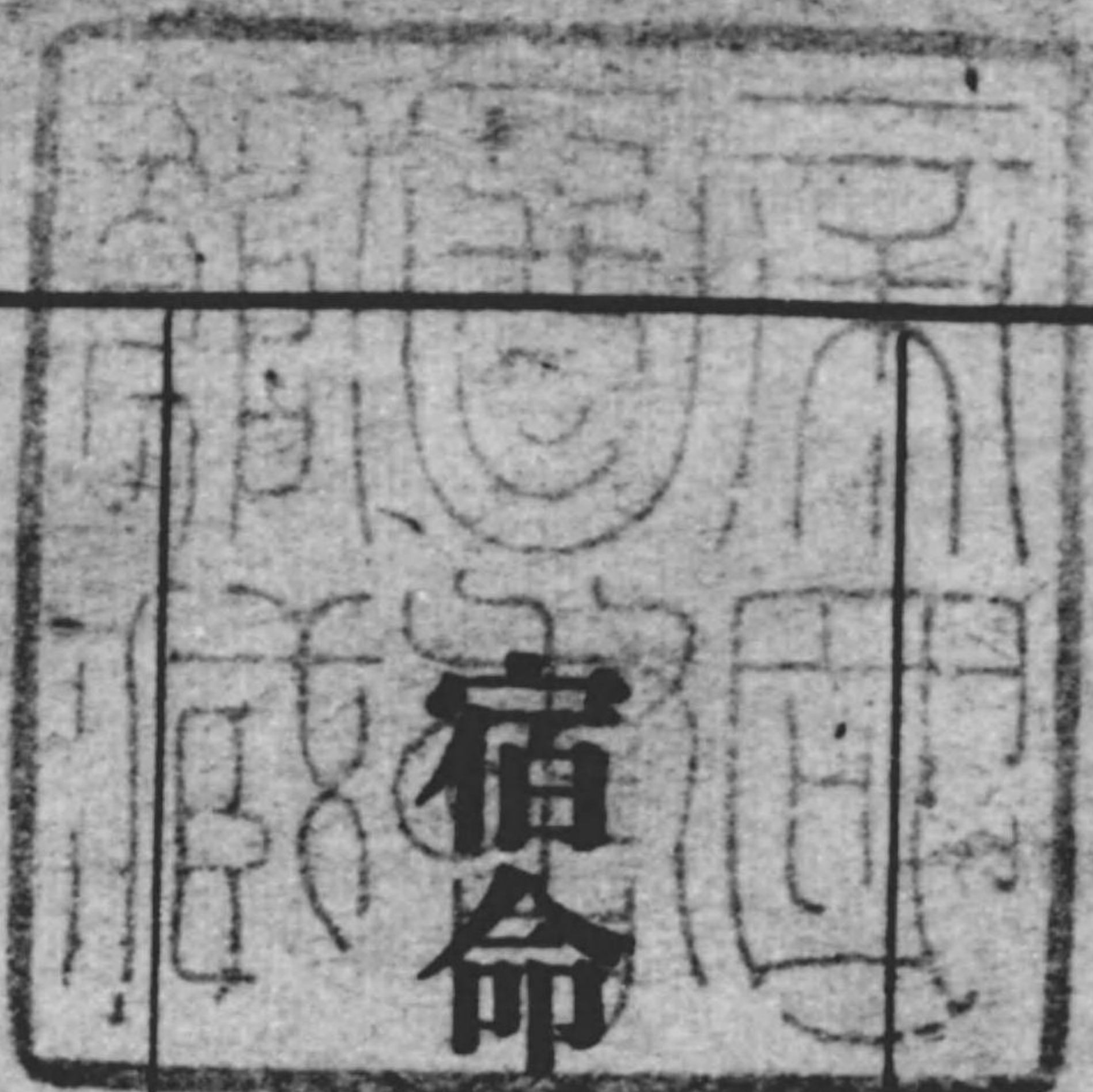
心學書

第百零四號發行

今は故に時方か



特248
452



松本忠雄著

宿命に立つ日支關係

東京・第百書房發行



宿命に立つ日支關係

目次

一、 日支は敵か味方か……………(五)

二、 過去の日支関係は？……………(六)

支那

1、 共同出兵提議を拒否……………(七)

2、 南京砲撃に不参加……………(九)

3、 漢口事件起る……………(二)

4、 山東出兵濟南事件……………(三)

5、 滿洲の揚轍阻止……………(三)

6、 通商條終の一方的廢棄……………(四)

7、 滿洲に於る日本排斥……………(五)

8、 遂に滿洲事變勃發……………(一六)

9、 更に第二第三の抗爭……………(一七)

10、 剿共第一抗日第二……………(一九)

11、 問題次第に解決……………(一九)

12、 對日態度益々轉回……………(二〇)

三、 抗日人民戰線成る……………(二七)

四、 頻發する對日テロ……………(二八)

五、 南京交渉の目標……………(二九)

六、 南京交渉の内容……………(三一)

七、 支那から提案の五ヶ條……………(三三)

八、 支那の病源は赤化……………(三四)

九、 日支親善は先づ目標の確立……………(三五)

一〇、 日支親善の相手は國民……………(三六)

一一、 大の蟲の爲に小の蟲を殺す……………(三七)

13、 對日態度轉向の原因……………(三)

14、 北支事件起る……………(四)

15、 對支三原則の確立……………(六)

16、 支那側の三條項……………(七)

宿命に立つ日支關係

一 日支關係の考察

宿命に立つ日支關係

松 本 忠 雄

一、日支は敵か味方か

日本と支那は隣同士の國である。この隣同士の國が、何時までも敵對々立の關係に立つて居らなければならぬか、或は此兩國が次第に仲の良い味方の國となれるか。

世界の實際を見るに孰れの地方に於ても、隣同士の國であればある程仲が悪く、對立關係にあるものが非常に多い。隣同士の國で仲が良い國は非常に稀だ。理想からすれば隣同士の國の間では仲の良いことが最も望ましいが、兎角に理想と現實の一致は困難で、隣接

宿命に立つ日支關係

する國家間にあつては反目抗争を事とする場合が多い。
日本と支那との關係に於て、仲の良い方がよいか？ 仲の悪い方がよいか？ と言はれたら、これは云ふ迄も無く百人が百人迄親善關係の樹立を切望して止まないと確信して疑はないが、然らば日本と支那との現實の關係はどうなつて居るか、現に私共の眼前に示されて居る事實を見る時に、甚だ残念ではあるが、日支兩國の間には對立抗争を續けなければならぬやうな原因が後から後から出て來て、現實は理想と逆行して居る事を認めなければならぬ。

二、過去の日支關係は？

一體、この日本と支那との關係に於ては、「親善でありたい」、「親善でなければならぬ」と云ふ理想と、對立抗争を續けて居る現實の事實とを調和し、この理想に現實を一致せしめて、兩國が眞の味方になることは、結局に於て不可能事であるか、或は可能であるか。

歴史を離れて現在は無く、過去を措いて將來を斷ずる事は出来ない、此點の判斷を得る爲に、暫く日支關係の過去を振り返つて見る必要がある。

然し日支關係を遠く遡る事はやめて、先づ今日支那を支配して居る蔣介石Ⅱ國民黨Ⅱ南京政府Ⅱ此の一連の勢力と、日本の今日迄の關係だけを振り返つて見やう。

1、共同出兵提議を拒否

蔣介石は、今や中華民國の獨裁権者であるが、私共が蔣介石の存在を始めて知つたのは今から僅か十一年前のことで、即ち大正十五年七月に、彼が北伐軍を率ゐて廣東から粵漢鐵道に沿ふて北上を開始した時であつた。

北伐に著々其功を擧げて、昭和二年四月南京に國民政府を組織して以來今日迄、蔣介石は著々其實勢力を把握して今日に及んで居るが、其間彼の支配する中華民國と我が日本との關係はどうであつたか。

此十年の間に日支の關係は、二つの全然異つた行方を經驗して來て居る。即ち蔣介石が宿命に立つ日支關係

北伐軍を率ゐて揚子江沿岸に出て來た當時に於ては、日本は非常にこれに好意を寄せた。當時の支那は久しきに亘つて軍閥の私闘に悩まされ、四億の民衆は塗炭の苦みに泣き、産業の發達は阻止せられ、通商貿易は妨害せられ其弊に苦しみ抜いて居つた爲新興勢力によつて新たに支那の統一を目指して出て來た蒋介石に對して日本は非常なる好意を寄せた。當時蒋介石の率いた國民革命軍の、最も花やかな標榜は「不平等條約廢棄」であり、廣東に發祥した事に原因して、英國の勢力打倒を第一の目標とした、其結果北伐軍が揚子江流域に出て來るや、此方面に牢固たる勢力を築いて居た英國の勢力を排除せんとして、先づ漢口に在るイギリスの居留地を暴力を以て奪還し、次いで九江に在るイギリスの居留地を同一筆法によつて奪還した。この事實を見た英國は、非常に憤慨すると共に、殘された英國の權益を死守するの決意を固め、其爲にインド及びイギリス本國より陸軍を支那に派遣し、力を以て其權益を擁護する事とし、昭和二年一月には英國から其事を日本に内示すると共に、日本の共同出兵を提議して來た。

(8)

然し、當時蒋介石の新興勢力に好意を寄せて居た日本政府は、多年の同盟國であつた英

國の提議であるに拘らず、斷乎としてこれを拒絶した、茲に於てイギリスは、止むを得ず單獨出兵を敢行したが、併し日本が共同出兵に應じなかつた結果、イギリスの腰は始めからふらくで、折角本國から送り出した兵隊を全部香港に上げた儘で、遂に支那大陸に足跡を印せしめずして、其儘送還して仕舞つたものも少くなかつた。

2、南京砲撃に不参加

若し、當時日本がイギリスと一緒に支那に出兵し、日英兩國の大軍が蒋介石——國民革命軍に對して壓迫を加へることになつたならば、或は蒋介石は今日の大をなすに至らずして、双葉にして摘まれてしまつたかも知れない。殊にこの日本が出兵提議に應じなかつたと云ふことは、たゞ日本が出兵しなかつたと云ふだけでなく、イギリスの出兵を或る程度にチエックすることに、非常に効果があつた。

尙これに次いで日本が蒋介石に好意を寄せて居た事を立證するに足る事實がある。蒋介石の勢力が次第に揚子江下流一帯に及び、昭和二年三月二十四日には南京に入城するに至

宿命に立つ日支關係

(9)

つたが、其際蔣介石の兵隊は、南京に於て非常な掠奪暴行を逞くし、當時南京に居つた外國人は、日本人もイギリス人もアメリカ人も、フランス人もイタリー人も悉く掠奪に遇つたが、此暴兵は個人に對して掠奪暴行を行つたばかりでなく、外國領事館に對しても暴虐至らざる無き態度に出で、帝國領事館も徹底的の掠奪を蒙り、領事以下悉く暴行を加へられた。

當時南京の揚子江上には日英米の軍艦が、孰れも萬一に備へて停泊して居つたが、國民軍が斯かる暴行掠奪を逞しうするや、此のイギリスの軍艦、アメリカの軍艦は直ちに砲門を開いて南京に對して砲撃を加へた。然るに日本の軍艦は之れと相並んで揚子江上に停泊して居つたに拘らず、此の砲撃に加はらなかつた。此事は砲撃に日本が加はらなかつたと云ふ丈でも非常な蔣介石に對する好意であるが、日本が加はらなかつた事實が英米の砲撃を或程度に止めしむる事に效果のあつた事を忘れてはならない、當時若し日、英、米三國の軍艦が、一緒になつて南京を砲撃したならば、南京はあの時に壊滅に歸してしまつたかも知れない。が、それと共に、こゝまで進んで來た蔣介石の軍隊も、みじめな末路を告げ

たかも知れない。

蔣介石の勢力が始めて揚子江流域に出て來た頃に、日本が如何に此新興勢力に好意を寄せたか、更に此好意が如何に蔣介石に高價に値したものであるかと云ふ事は、此の二つの事實によつて十分に知る事が出來ると信ずる。

3、漢口事件起る

然るに此の日本の絶大なる好意は何を以て報いられたか、南京事件の直後、漢口に於て日本軍艦の水兵一支那人との間に街頭に於て小競合が起るや、多數の群衆が此の日本水兵に對して暴行を加へたのみでなく、多數の群衆は日本居留地に押掛けて來て、居留地内の邦人に非常な暴行を加へ、我國は陸戦隊を上陸せしめて、力を以て支那人の暴行を鎮壓するの餘儀なきに至つた。

更に南京事件の解決交渉については、支那は事件に何等關係無き不平等條約改訂に關する豫約條項を挿入せん事を求め、我國が之を拒否するや、本件の解決については、南京に

對して砲撃を加へなかつた日本を、他の關係國のドン尻に廻して仕舞つた。

4、山東出兵濟南事件

斯くの如くして日支の關係は纏れ始めたが、昭和二年四月蔣介石が愈々兵隊を率ゐて、南京から更に北上することとなり、途上山東省を過る事となつた。此山東省には在留邦人も多く、日本が此に有する權益も大なるものがある爲、此處を彼の暴虐を恣にする國民革命軍が通るとなれば、日本としては豫め備へる處が無ければならぬ事となり。我國は遂に山東出兵を行つた、併し此時は蔣介石の北伐が中止せられた爲、我山東派遣軍は僅か三四ヶ月で内地に引揚げたが、翌三年五月再び蔣介石の北伐が行はれる事となつた爲、前年と同一の理由により第二回目の山東出兵を行つた。

然るに當初我國が憂慮した通り、蔣介石の率ゐる國民軍が濟南の在留邦人の商店に對し掠奪を始めた爲、遂に日支軍の衝突となり、所謂濟南事件となつたが、南京政府は本事件に關聯し全國に排日を指令し、遂に支那全土に深刻な排日運動が起された。

5、滿洲の揚幟阻止

濟南に於ける日、支の衝突が一段落着いて、蔣介石は北京天津に迫つて來た。これを見て當時北京に居つた張作霖は、北京を引揚げて奉天に歸つたが、昭和三年六月二日拂曉彼の乗つた列車が、奉天郊外に達した時に、爆彈に見舞はれて張作霖は横死した。其後の東三省は息子の張學良が總司令となつて之を支配することとなつた。

南京政府は此學良を説いて、從來作霖時代には中央政府に對して、半獨立の存在であり多くの問題は中央の指令を待たず、東三省の現場で處理して來たのを改めて、外交交通其他の政權を悉く南京政府の手に收め、青天白日旗を掲げしめる事に成功するに至り、學良は此旨を日本側に内報して來た。

日本は其特殊の地位と權益を有する滿洲に、共產黨をバックとする國民黨の政治を及ぼす事を妥當ならずとして當時の田中總理大臣の個人的代表として、張作霖の葬儀に列した林男爵をして張學良に説かしめた結果、滿洲に青天白日旗を掲揚する事は暫く見合せに

宿命に立つ日支關係

なつた。

6、通商條約の一方的廢棄

此事から南京政府の對日態度は一層激化して來たが、昭和三年七月に南京政府が日、支間の通商航海條約を一方的に破棄して仕舞つた事は日本の朝野をして大に憤慨せしめた。當時改訂の交渉中であつた此の日支間の基本的條約を一方的に廢棄し、日本は以後無條約國として取扱ふ。在留日本人は無條約國人と同じ取扱ひをして、治外法權を與へず、支那の裁判權警察權に服従せしめんとした事が、非常に日本のセンチションを惹起した事は當然である。

斯くの如き事件の頻發により、日支關係は次第に惡化し來たが、然し對立抗爭を續けて居る際に於ても、日本と支那との問題にして解決したものも絶無ではなかつた。即ち濟南事件の後始末もついた、南京事件、漢口事件の解決も出來、關稅に關する協定も出來たが、滿洲に於ける日支の衝突は遂に日支關係を全面的の衝突に導いて仕舞つた。

7、滿洲に於ける日本排斥

則ち蔣介石の張學良抱き込みは、日本の反對によつて一時延期せられたが、程なく張學良は國民政府に合流し、東三省の外に熱河省の支配を委ねられる事を條件として、外交、交通其他に關する、從來の特權を悉く南京に奉還し、滿洲も完全に國民政府の支配下に置かるゝ事になつた。

さうすると革命外交をモットーとする南京政府は、日清、日露の二大戦争に際して、日本が非常な努力と犠牲を拂つた結果、日本が滿洲に持つて居る、特殊權益、特殊の地位を否認して、從來の歴史も因縁も既成事實も一切無視して、日本に向つて旅順、大連の返還を要求する。南滿洲鐵道に就ては日露戦後の北京協定を無視して、其東と西に支那の並行線鐵道を敷いて、夫れによつて滿鐵の貨客を奪つて大連以外の支那の港に持つて行くことを計畫し、日露戦争の結果日本が滿洲に築き上げた權益を土臺から覆して仕舞はうとするに至つた。この事實を見て日本の輿論が憤慨したのは、洵に己むを得ない處である。

斯くて日本の國論が憤激の極にあつた時に、更にこれを激化せしむる事件が起つた。即ち昭和六年の春萬寶山事件と云ふものが生じ、今日の新京——當時の長春の北の方で朝鮮人農夫は支那官憲の爲に不當なる壓迫を受けたが、それに次いで中村大尉事件、……日本の現役大尉である中村大尉が、支那政府の旅行免狀護照によつて生命、財産の安全を保障されて、蒙古の方へ旅行した際、其が途中で支那軍隊の爲に慘殺された。一つは我が同胞が支那官憲から壓迫暴虐を蒙つた事件、一つは我現役將校が支那の軍隊から慘殺された事件である。たゞでさへ日本の輿論が激昂して居つた際、この二つの事件が起つたのであるから、日本の國論正に爆發せんとする状態に達した。

8、遂に滿洲事變動發

然るに偶此際即ち昭和六年九月十八日に彼の柳條溝事件が起きたのである。一觸即發の危機にあつた、滿洲の事態はこれによつて直ちに爆發した、日本は直ちに自衛權を發動せざるを得ざるに至り、此に滿洲事變が起きた。滿洲事變後の事は、多くを説くを要しない

が、滿洲事變が起きると、支那は日本との間の直接の交渉によつて之を解決すべき事を一旦は約しながら、後に至り前約を食んで國際聯盟に訴へ、第三國にすがり益々事件を擴大せしめて仕舞つた。

其中に昭和七年一月二十八日には上海事件が起り、支那は國際聯盟總會の開催を要求して、茲に世界の五十何ヶ國を前にして、日支交々論争しなければならぬ事となり、其結果日本は滿洲國の獨立を承認し、國際聯盟を脱退する事となつた。これより支那の日本に對する抗日、排日的手段方法は益々深刻を加ふるに至つた。

9、更に第二第三の抗爭

日支の全面的對立の裡に昭和七年を終つたが昭和八年になると、更に兩國の間に新しい衝突が起つて來た。即ちそれは熱河の肅清で、熱河省は最初滿洲國の建國に當つては共に獨立を宣言したが、其後に至り寢返りを打ち、熱河省内に張學良の舊東北軍を入れて、此から頻に滿洲國內の治安攪亂を行つた、茲に於て昭和八年二月の末に至り、滿洲國は愈々

宿命に立つ日支關係

熱河の肅清を執行する事となり、滿洲國軍と日本軍とが協力して熱河に進出し、其結果は難なく張學良の軍隊を熱河から驅逐して、僅か十日餘りで熱河全省の肅清を完了し得た。然るに熱河省を逃れ、萬里の長城を越えて北支那に入つた舊東北軍は、日本軍隊が滿洲國と中華民國との國境である萬里の長城の一線に停つて、夫れ以上北支に進出せざるを見るや、再び勢を得て萬里の長城の一線に止まつた日本軍に對して、反抗的態度に出でたり或は又滿洲國擾亂の作用を繰返すに至つた。

茲に於て關東軍は、昭和八年四月に愈國境を越えて北支那に乗出し、この反滿抗日の態度を續ける支那軍を徹底的に膺懲しなければならぬこととなり、此に北支問題の發生を見た、北支に進出した日本軍は僅か五日か十日で、北京、天津の直ぐ近くまで迫つたが、すると支那軍から、日本軍に對して軍使を送り妥協を申出で、其結果昭和八年五月三十日の北支停戰協定の成立となり、北平天津の東に一線を劃して、この線から東は支那の方で軍隊を入れない、且この停戰協定の線の内外とを問はず、日本に反抗したり、日本に挑戦するやうな行動を執らない事を約束した。そこで、北支に進出した關東軍は全部滿洲國內に

引上げて北支事件は濟んだ。

10、剿共第一抗日第二

さうすると此頃から支那の日本に對する態度が變つて來た。即ちそれまでは支那は全力を擧げて日本に反抗し、一方には國際聯盟や、第三國を動かして日本を制壓しやうとしたが、昭和八年四月になると蔣介石は南昌に重大會議を開いて、支那として、剿共第一（共產黨掃滅）抗日第二と云ふ新方針を決した。それまでは日本に反抗することと、滿洲の失地回復を唯一の旗印として來た支那が剿共第一、抗日第二となつた事は非常な轉向で、夫れ以來支那の日本に對する態度はだん／＼と變つて來、支那に於ける排日も幾分宛緩和して來た。

11、問題次第に解決

滿洲事件以來支那の對日態度は全面的抵抗で、日本の云ふ事は一切耳を傾けないと云ふ

宿命に立つ日支關係

有様であつたが、此頃から一面抵抗、一面交渉に變り、多少共日本の提議にも應ずるやうになつた。

即ち昭和九年になると、先づ滿洲國と北支那の間に鐵道を連絡運轉する爲の通車問題が解決し、次いで萬里の長城の滿支の國境に支那の税關を設けて、滿洲國から支那に来る貨物に對して輸入税を、支那から滿洲國に入る品物に對して輸出税を徵收する設關問題が解決し、これが済むと、昭和九年の暮に迫つてから、通郵問題、滿洲國と支那との間に郵便の聯絡を開始する問題が解決せられた。更に日本と支那との間の問題でも、昭和九年十二月には無線電信連絡の協定が成立し、日支の關係は確かに一大轉化を示すに至つた。

(20)

12、對日態度益々轉回

斯くの如く轉回して來た日支關係は昭和十年には、更に一大轉換をした。蔣介石が共產黨討伐第一、抗日第二を標榜してから其剿共工作が大に成績をあげ、昭和九年の秋には多年江西省に蟠居して居た共產黨を、此の本據から追出す事に成功した。依て昭和十年一月

の議會で廣田外務大臣が、此の蔣介石の共產黨討伐の成績の擧つた事に對する敬意を表する演説をした事がキツカケになつて、支那は其對日態度を斷然改めるやうになつた。

其數日後である二月一日には、蔣介石は政府の御用通信である中央通信社を通じて、日本と支那とは隣同士の國である、互に仲良くしなければならぬとの談話を發表したが、これに次いで、當時の行政院長汪兆銘は排日の取締を訓令すると共に、行政院會議に出て、日支親善の必要を力説し、次いで蔣介石がこの汪兆銘の演説を裏書して、全幅の賛意を發表する旨の聲明を發したり、更に蔣介石と汪兆銘とが連名で命令を出し、約法に準據として財産の保障、職業の自由を尊重すべき旨を布告した。これは日貨排斥禁止の爲の側面から考慮しての處置である。更に、排日新聞紙上からは非常にセシメ、さうすると支那の日本に對する態度は、全く面目を改め、支那新聞紙上からは非常にセシメ、排日記事は全く消え失せ、支那全國都市となく農村となく充滿して居た排日のポスター、排日の標語は悉く除き去られて仕舞つた。

(21)

13、對日態度轉向の原因

そこで吾々は、支那の態度が斯う變つたのは何故かと云ふことを考へさせられる、其理由として最も有力に行はれる意見は、日本が支那の反抗に屈せず、滿洲に於て日本の權益を侵せば斷乎力を以て之を擁護し、國際聯盟に訴へても、第三國の干渉を求めても、日本は斷然其態度を更へず、更に熱河によつて抗日を行へば、熱河を肅清し、北支に於て日本に反抗すれば北支に進出して、毅然たる態度を以て力によつて支那をおさへたからであると云ふにある。

此見方が正しいかどうかには就ては、若干の議論はありませうが、少くとも吾々の眼前に展開された事實は、さう結論させるべきものである事を認めなければならぬ。

そこが、吾々が日支關係に於る支那の態度について非常に遺憾に考ふる處である。詰り支那は力を以て行けば結局言ふことを肯くが、力を持つて行かずして、好意を以つて行けば、却つて之を侮つて少しも其言ふ事を肯かないと云ふ事が事實の上に證明せられて居る

そこで支那に臨むには結局力で無ければならぬと考へるやうになる。

私は昨年南京に遊んで、當時の行政院長汪兆銘に會見した際、汪院長が頻りに日本と支那との關係が實に困つたことになつて行きつゝあると訴へたのに對し、私は斯う云つた。

「日本は貴方の國に對して非常に好意を有つたこともあつた。所が日本が好意を有つて貴方の國に對した時に、貴方の國は好意を有つて私の國に報いたか、寧ろ日本が好意を有つて對した時に、侮りを有つて之に報いたではなかつたか、日本が一步退けば、支那が一步進み、日本が二步退けば、支那は二步進み、日本が退けば退く程支那は進んで来たではないか、それでは支那に好意を有つて居る日本人の立場は全部無くなる、日本が支那に好意を有つて對した時に、支那が好意を有つて日本に報いて來れば、その實物の教訓は、日本が好意を有つて對すれば、支那は好意を持つて來るのである。即ち日支親善の爲には日本が支那に好意を持つに限ると云ふ事になり、そこに日本の對支政策の根幹が置かるゝ事になる、然るに不幸にして支那は好意に報ゆるに好意を以てせず、力を以て臨んだ時に始めて日本の言ふことを肯くと云ふ事が過去の事實の示す處である。従つて斯う云ふ事實を見

たものは、支那に對する日本の遣方としては、結局力によらなければならぬと感ずるやうになる故に、日支關係調整には、先づ支那の斯う云ふ態度から改められなければならぬでは無いかと。私共は昭和八年春以來の支那の對日態度の轉向振を見て、ツクなく此感を深くせざるを得なかつた。

14、北支事件起る

兎に角、昭和九年から十年に及んで支那の對日態度が改まつて來ると、今度は日本でも日支關係の立直しの爲に乗出し、遂に十年の五月には各國に率先して、今まで公使館であつたものを大使館に昇格して、日支兩國間に大使を交換し、こゝに明朗なる日支關係を樹立しようとした。

然るに此日本政府の考へ方には若干の錯誤があつた。詰り、支那が排日の取締りを出した、蔣介石の聲明、汪兆銘の演説があつた、日支の間の懸案で解決したものがあつた、もう支那は日本に對して好意を有ち、日支親善に一向に邁進するものと思つて、日支間の新外

交關係の樹立を圖つた事は早過ぎたと考へなければならぬ事になつた。即ち日本が斯かる態度に出たその當時、北支那に於ては何が起つて居たか。北支那の現場に於ては、依然として陰に反滿抗日の行動が繰返されて居つた。孫永勤と云ふ匪賊が、萬里の長城を越して熱河省内でいたづらをする、それを擱へて源を洗つて見ると北京天津にある、中央軍が絲を引いて居る、天津の日本租界に於て、一晚の中に、支那人の新聞社長—日本に好意を寄せて居る—二人が暗殺された、その暗殺した者の筋をたどつて見ると、どうも南京政府の配下の者の所業であることが判つて來る、察哈爾内蒙古に於て、今日は北支の支配者となつて居る宋哲元が、兎角に隣接の熱河にある日本の軍隊に對していたづらをする、關東軍の將校等に不法行爲を責むる。

日本は支那はもう眞に日本に對する態度を改めて、心から親日態度を執つて居るものと見て居つたに拘らず、斯う云ふ事實が暴露するに至つた爲、これでは支那は偽裝の親日ではないかと云ふ事になり、昭和十年六月の北支事件となつた。

折角、日本と支那との關係がよくなりかければ、斯う云ふ思はざる妨げが出て來て、或支那と日本は敵か味方か

程度好轉して來た兩國の關係は、又逆轉しなければならぬことになつて仕舞つた。

其後十年十月に北支方面の自治運動が原因となり、第二回目の北支事件が起きて、北支に於る日支の關係は非常に切迫し、夫れと共に日支關係の全體にも其影響が及んで、爾來日支の關係は改まるが如く、改まらざるが如くして、行きつ戻りつの状態を續けて來た。

15、對支三原則の確實

然し我國としては、日支國交調整の必要を痛感し、其爲には先づ日本の支那に對する方針を確立しなければならぬ。支那が如何なる態度を執るに拘らず、日本として支那に對する方針は確立して置かなければならぬ、と云ふ事になり、十年の十二月に所謂對支三原則なるものを決めた。その第一は、支那の方に於ては絶対に排日抗日の行動を執らないこと第二は、日本と滿洲國とは不可分の關係にある。その滿洲國を支那の方で偽國と稱したり儼然として居る獨立國を抹殺したり、否認したりするやうな態度を執つては、これと不可分の關係に在る日本と、支那との關係は親善を期し得らるゝものではない。故に支那は徒

らに滿洲國を否認したり、抹殺したりしようとするやうな態度を改めて、進んで滿洲國の獨立を承認する事が必要である。併し、今直ちに支那が滿洲國を承認することは困難であらうが故に、今直ちに承認を求めないが滿洲國を否認したり、抹殺するやうな行動をしてはならぬと云ふこと。而して第三は、共產黨の勢力が支那に浸潤して來ることには日本としても滿洲國としても痛切な利害關係を持つ、これを對岸の火災視する事は出来ないが、支那が獨力を以て共產黨の勢力の浸潤を防ぐことは不可能である故に、日支力を協せて共同して赤化を防止することと云ふにあり、日本は此の三原則を支那に示して其同意を求めた。

16、支那側の三條項

支那ではこの日本の對支三原則に對しては、必ずしも反對しない。然し全幅の賛成をも表せず、更に支那の方から支那側も三ヶ條の申分があると云つて、日支兩國は互に獨立國として相手國の主權を尊重すること、支那の領土權を侵さないこと、兩國間の問題は外交

上の交渉に依つて解決すること等の條件を出して來た。

三、抗日人民戦線成る

さうやつて三原則と三條項で互に押問答をして居る間に、日支の關係は益々逆轉して、支那には遂に抗日人民戦線の結成を見るに至つた。

人民戦線は今日の一つの流行語で、ヨーロッパに於ては、ファッショ對抗の爲に人民戦線が形成せられて居るが、支那では抗日救國を目標とする支那版の人民戦線が組成せられ、頻に日本に宣戦する事を要望して居る、之を支那で一番先に唱へ出した者は中國共産黨で中國共産黨は三四年前から抗日の爲の人民戦線統一を唱へ、今日の支那は國內で對立して居る時ではない、國內對立を完全に解消して國力の總てをあげて日本に當るべきであると稱し、力の有る者は力を出し、金の有る者は金を出し、武器のある者は武器を出して、總ての力を統一して日本と一戦をしなければならぬ。その軍資金は別に心配は要らない。支那に日本が有つて居る經濟的の力帝國主義的進出の總てを沒收して、之に充てると絶叫し

で居る。

今や此の共産黨の提唱が、次第に各方面の共鳴を得、昨年十二月に北平の學生が、日本に對する反抗の爲のデモをやつた事から、先づ學生の抗日運動の統一が出來、次いで全國的の抗日救國團體の聯合會が出來た。

殊に昨年七月モスコに開かれた第七回コンミュニテルン大會に於て中國共産黨の任務は支那に於ける各勢力を統一して、日本の支那に對する侵略に對抗するにありと議決してから、中國共産黨の抗日勢力聯合の運動は、層一層活潑となつて來た。斯くて今や支那では共産黨が中心勢力となつての抗日運動が展開せられて居る。

殊に支那に於ては多年抗日教育、排日教育を、幼稚園や小學校から始めて組織的に、系統的に施してある爲、一度點火すれば抗日の火は何時でも燃え上るやうになつて居る。

四、頻發する對日テロ

夫れが日支の關係の上に現はれて來たのが、この八月以來頻々として行はれた、支那に

宿命に立つ日支關係

於ける日本人に對するテロ行爲、即ち彼の成都事件、北海事件、漢口事件、第一第二の上
海事件等である。

そこで、之をどうするかと云ふことが、今日の問題となり最近既に三ヶ月に亘つて、南
京に於て川越大使と南京政府との間に交渉せられて居る處である、此の成都事件、北海事
件、漢口事件、上海事件と云ふやうなものは、單に事件其もの丈けを解決しようとするれば
夫れは比較的簡單にして、紋切型の解決の方法は決つて居る。第一は、さう云ふ日本人に
對するテロ行爲を行はせるやうな不取締を演じた、その地方の責任有る支那側の役人を支
那で處罰すること、第二は斯かる犠牲者に對する賠償、第三は、日本國民に對して左様な
不都合なことを惹起した事について、支那政府が日本政府に陳謝すること、第四は、將來
二度と再び斯様なことを起させませぬと云つて、將來の保障を日本に出すこと、この四つ
以外に出で得ない。支那の方は是等の事件に對して、支那の方が百パーセント悪かつた、
是等の事件は國際法の慣例の認める所に依つて、進んで之れを解決すると云つて居る。
併し、日本の立場としては、是等の事件に紋切り型の解決方法を付けた丈けでは、全く

無意味であると信ずる。

五、南京交渉の目標

そこで、今回の南京交渉に於て、川越大使は、そんな紋切型の解決は後廻しにして、そ
の前に解決しなければならぬ問題がある。即ち二度と再び斯様な事件を起させないやうな
處置を講じて置く事が必要である。それにはどうするかと云ふに、南京政府が心から日本
と仲をよくして、日本と親善、提携をして行くと云ふことである。之は單に命令を出した
り、聲明を出したりした丈けでは支那國民に、徹底しないのみならず、支那國民をして南
京政府の眞意が果して何處にあるかを納得せしめ得ない、従つて的確なる事實を以て之
を國民の目の前に立証して見せる事が必要である。さうして此事實の證明を示すの途は、
此際支那が日支兩國の間の、幾つもの懸案をサツパリと解決して、これによつて政府が自
ら身を以て國民に指導精神を示す事で無ければならぬ。

之を以て我國は此の頻發した日本人に對するテロ行爲につき、單に紋切型の解決を求め

る丈(ただ)けで無く、此際(このとき)日支(にっし)間の懸案(けんあん)解決(けつげつ)を要望(ようぼう)するの方針(ほうしん)に出(い)で、其爲(そのため)に數ヶ條(もんじょう)の問題(もんだい)が川(かわ)越(こ)大使(たいし)から支那側(しながは)に提議(ていぎ)せられて居(ゐ)ると新聞社(しんぶんしゃ)は傳(た)へて居(ゐ)る。

六、南京交渉の内容

その一つは北支那(きたしな)の問題(もんだい)で、之(これ)は北支那(きたしな)は滿洲國(まんしゅうこく)に接壤(けつがう)し、互(たが)に言葉(ことば)を同じうし人種(じんしゆ)を同じくして居(ゐ)るものが相接(あひまじ)して居(ゐ)る地(ち)である。故(ゆ)に此地方(このちほう)については支那側(しながは)に於(お)て、特殊(とくしゆ)の制度組織(せいどそくし)を認め(たづね)、此(こ)の現場(けんば)に於(お)て日滿支(にっまんし)が親善提携(しんぜんていけい)し得(え)らるゝやうにせよと云(い)ふものであらうと思(おも)はれる。

次(つぎ)は、日支共同(にっしきゆう)して共產黨(くわんさんとう)を防止(ぼうし)すると云(い)ふ事(こと)で、對支三原則(たいしさんげんそく)の第三(だいさん)に擧(あ)げられた所(ところ)と同一(どういつ)のものである。今(いま)や支那(しな)の抗日運動(かうていどうどう)の原動力(げんどうりきよく)をなすものは中國共產黨(ちゆうくわんさんとう)で、その中國共產黨(くわんさんとう)の背後(かいはう)にあるものはコンミンテルンで、これが主(しゆ)となつて、支那(しな)の排日(はいにち)を煽(あお)つて居(ゐ)る。殊(こと)に又(また)南京政府(なんきんせいふ)は共產黨(くわんさんとう)を正(せい)向(きやう)の敵(てき)として討伐(たうはつ)して居(ゐ)るのであるが故(ゆ)に、日支協力(にっしきりやく)しで此事(このこと)に當(あた)らうと云(い)ふのであらうと信(しん)ずる。

その外支那(がいしな)と話(わ)をして居(ゐ)る問題(もんだい)には、或(ある)は南京政府(なんきんせいふ)に日本人(にっぽんじん)の顧問(こもん)を入(い)れろと云(い)ふ事(こと)もあると云(い)ふ、現(いま)に南京政府(なんきんせいふ)にはイギリス人(いぎりすじん)、アメリカ人(あめりかじん)、ドイツ人(とつしじん)等(ら)澤山(たくさん)の外國人(がいこくじん)の顧問(こもん)は居(ゐ)るが、日本人(にっぽんじん)は一人(ひとり)も居(ゐ)ない。この事實(じじつ)を支那(しな)人(じん)が見(み)て何(なに)と考(か)へるか、如何(いか)に南京政府(なんきんせいふ)が日本(にっぽん)との親善(しんぜん)を説(と)いても、南京政府(なんきんせいふ)は多數(たすう)の外國人(がいこくじん)の顧問(こもん)を入(い)れながら、日本人(にっぽんじん)は一人(ひとり)も傭聘(ようへい)して居(ゐ)ない事は、國民(こくみん)をして南京政府(なんきんせいふ)の口(くち)に言(い)ふ處(ところ)と肚(はら)の中(なか)とは違(ちが)つて居(ゐ)ると思(おも)はしめるであらう、故(ゆ)に南京政府(なんきんせいふ)の中に日本人(にっぽんじん)顧問(こもん)を入(い)れて、此事實(このじじつ)に依(よ)つて南京政府(なんきんせいふ)の眞意(まことい)を國民(こくみん)に覺(さ)らせることが日支親善(にっししんぜん)の爲(ため)に效果(こうくわ)がある。これが日本人(にっぽんじん)顧問(こもん)の傭聘(ようへい)を求め居(ゐ)る所以(ゆゑ)であらう、次に支那(しな)は日貨(にっか)の輸入妨害(ゆいりゅうぼうがい)の爲(ため)に特に關稅(かんぜい)を引上(ひ)げて居(ゐ)る事實(じじつ)があるが、その關稅(かんぜい)を適當(てきとう)に引下(ひ)げて、日本(にっぽん)の商品(しやうひん)が特に支那(しな)に入り悪(わる)くなつて居(ゐ)るのを是(ぜ)正(せい)しろと云(い)ふ問題(もんだい)もあると云(い)ふ。

尙(なほ)此外支那(このほかしな)と日本(にっぽん)との間(ま)に飛行機(ひこうき)の連絡(れんらく)を付(つ)けろとか、支那(しな)でかばつて居(ゐ)る不逞(ふてい)鮮(せん)人(じん)を其翼(そのつばさ)の下(した)から出(い)出して日本(にっぽん)に引渡(ひきわた)してしまへとか、成都事件(せいとじけん)のあつた四川省(せいしゆんせい)の經濟開發(けいぎかいはつ)に付(つ)き日支提携(にっしていけい)して當(あた)れと云(い)ふが如(ごと)き問題(もんだい)もあると云(い)ふ。

七、支那から提案の五ヶ條

然るに、此交渉が開始されてから、既に三ヶ月に亘るが、容易に解決せざるのみならず九月廿三日かの川越張群の會見に於て、張群外交部長は、日本と支那との國交を直すならば、日本の方で支那の言ひ分を聽いて貰はなければならぬものがあると云つて、支那側から上海停戦協定及北支那停戦協定の廢棄、冀東政權の解消、北支密輸入の禁遏、北支那に於ける日本の飛行機の飛行禁止、内蒙偽軍の解散等の五つの問題を提起して來たと新聞紙は傳へて居る。

是等の問題は、多くは支那の國內問題で日本としては如何ともし難い、停戦協定廢棄飛行禁止及び日本の問題であるが、夫れは上海事件、北支事件の跡始末であつた關係上、此場合取上げる事は其時機で無い。殊にあの成都事件、北海事件、其他の事件でも、孰れも日本は被害者である。被害者の日本が加害者の支那に向つて問題を出して居る時に、加害者の支那から被害者の日本に條件を突き付けるが如きは全く逆さ事である、そんな事で南

京交渉は遅々として進まず、従つて日支國交は依然暗雲低迷の状態にあつて、更に明朝にならない事は、私共の日支兩國の爲に遺憾に堪へない處である。

八、支那の病源は赤化

然らば支那は何故に斯くの如き不誠意極る態度に出で、日支國交調整に熱意が無いのか私に其理由を考へて今日の支那は正氣で無い事を第一に數へ度い、今や支那には共產主義と云ふ狐がついて居る。かつて蒋介石が大正十五年七月討伐を開始した當時にあつては、國民黨は容共政策を採つて、ロシアの共產黨と合作し、全部其援助と指導とに俟つた、其後蒋介石は共產黨と絶つたが、一度共產黨の色に染つた、その色は何時までも抜けきらずに、共產黨の精神ややり方は今も國民黨の中に多分に残つて居る。これが日支國交の調整について一番の邪魔で、南京政府がこれを清算しない限り、今日の支那の態度を改める事は不可能である。

現に蒋介石は、一方では頻に共產黨赤軍を討伐して居るが、一方では共產黨のする事で

も自分の方に都合の好いやうな事は見て見ない振りをして、之れをやらせて居る。現に共產黨の抗日人民戦線統一運動の如きは夫れである。

故に日支國交調整の道は先づ此の共產黨の影響を完全に除却して、支那が本心に立ち返つて、速かに南京に於ける交渉に付て、日本の提議に應ずる事である。

九、日支親善は先づ目標の確立

故に日本と支那と親善する途の、第一段階は共產黨の勢力を支那から完全に驅逐し、支那が共產黨の狐付きから本心に復する事で、夫れに次いでこの段階としては、日支親善によつて達成すべき日本と支那との共同の目的を決める事である、詰り、日支親善は手段であつて目的では有り得ない。個人と個人であれば仲好くすると云ふことが、最終の目的である事もあり得るが、國と國との間は仲好くすると云ふだけでは値打が乏しい。仲を好くして其協力によつて共同の目的を達成すると云ふ點に仲をよくする必要と價値がある。

此の共同の目的が定まらず、互に目指す目的が區々であるならば、假に仲好くした所で

いつ迄も仲好くはなれない。此に二人の友人があつて仲好くして、一緒に旅をしようとして旅に出ても、其始に於て旅の目標を定めずに置いて、相當一緒に歩いてから。一人は山一人は川へ旅をすると云ふことでは、元は一緒であるが、これから先は互に争はなければならぬことになる。それで吾々は日本と支那と長く親しくして行くと云ふには、日支が仲好くして何を目指とするか、何の目的の爲に仲好くするかと云ふ其目標を定める事が必要であると信ずる。

一〇、日支親善の相手は國民

次に日支が親善すると云ふのは、誰と誰とが親善するのか、互に其相手を決めて置く事が必要であらう。嘗て大正六年寺内内閣の時に尾崎行雄氏は、議會の壇上に於て寺内内閣に肉薄した、寺内内閣は日支親善をすると云ふが、支那の誰と親善するのか、支那政府と親善するのか、國民と親善するのか、政府がやつて居る日支親善は、支那の政府と親善すると云ふのではないか、夫れでは相手の政府が倒れた後には、日支親善は跡形もなくなるの

みならず、其政府に對する國民の反感から、却て反對の作用を起す事になりはしないか、と切論した、此尾崎先生の言は不幸の中し、日本は段祺瑞に金も貸した、兵器も貸した、凡ゆる援助と好意をやつたが、その段祺瑞政府が倒れる、段祺瑞政府に對する反感から支那國民の日本に對する反感が、非常に尖鋭化したことがあつた。此例から見ると親善は支那の誰とするかを決めなければならぬが、吾々は單に時の支配階級、時の政府と云ふ、そんな壽命の短いものとのみ親善せずして、支那國民と日本國民とが親善すると云ふ工作に進むべきであると思ふ。

一一、大の蟲の爲に小の蟲を殺す

斯くて進むべき目標が定り、その目標を目指して互の國民と國民とが親善する事になつて、始めて眞の日支親善を期し得ると考へる。

之れに反しこの二つが確立しなかつたならば、日支は隣り同士であるだけに却て悪くなる、兩國は關係が密接、複雑であるだけに、常に「ごた／＼」すべき原因が起つて来る。「ごた

／＼すれば對立抗争する事となるが、此場合兩國が協力して達成すべき大きな目標が決つて居れば、此の大の蟲を生かす爲に他の小の蟲を殺して、小さい「ごた／＼」は大きい目的を達する爲に適當に互讓妥協して解決して仕舞ふ。

今日、日本と滿洲は共存共榮を目的として居るが、然し兩國の間には何時も色々な事件が起る、殆ど四六時中問題がある。問題はありますけれども、日滿共存共榮の爲に、さう云ふ小さい問題は、お互の互讓妥協に依つて悉く解決して行く。だから、日滿の間には對立抗争がない、日滿兩國間に衝突すべき問題がなきにあらず却て、うんと澤山あるが、大きな蟲を生かす爲に、小の蟲を殺して、之を適當に解決して行くから兩國の親善を保ち得る、吾々は日支關係も亦斯くあるべきである。斯くならなければならぬと考へて居る。さうなれば日支親善は出来る。日支は味方になる得る、さうならなければ、日支の對抗は避け難い、日支は敵とならなければならぬ。

詰り、日支親善は爲さんとして、爲し得ざるものにあらず、お互の考へ方、態度如何に依つては出来るものであるが故に、此の東亞の天地に相隣して位する兩國が、親善提携す

ることが出来得る存在であるやうに吾々は努力しなければならぬ。——(完)——

「第百書房」だより

◇日支紛争は止まる所がありません。北支、蒙古が騒ぎ出した、川越張群兩氏の外交交渉も殆んど決裂に近い、と云ふ状態です。そこへ日獨協定が發表された。これの支那に及ぼす影響支那はどういふ態度に出るか。

◇斯る際「支那と日本は敵か味方か」の根本問題を提供した事は意義深いものがあると思ひます。そして、蔣介石の抗日政策は何處から發散するものか、この究明と相俟つて、日本と支那の關係を赤裸々にして餘す所がありません。

◇筆者松本忠雄先生は、前外務參與官、衆議院議員にして支那通として聲明の高い事は紹介する迄ありません。

◇内容と筆者の名コンビで、本書房パンフレットの指命と價値を益々發揮充實させて行く考へで居ります。御氣付の點は御叱聲下さい。

書命に立つ日支關係

定價 十錢(送料二錢)

昭和十一年十二月三日印刷
昭和十一年十二月七日發行

著者 松本忠雄

發行兼印刷人 伊藤稔
東京市芝區田村町三十番地

(載轉製複許不)
印刷所 文光社印刷所
東京市神田區旭町十二番地

發行所 第百書房

東京市芝區田村町三十番地
振替東京九〇七七番

營業所 東京市芝區田村町五番地

東京鐵道局公認 鐵道保養會(道各線ホ1ム)
鐵道弘濟會・鐵道授産會・富田報英堂

森田書房(全國一手扱)

東京堂(書店一手扱)

新正堂(京阪神一手扱)

川瀬書店(名古屋)

大取次

來 間 恭著

定價 十錢 (送料二錢)

宇垣一成と近衛文麿 (近日發賣中)

— 廣田内閣の運命と次期政權の二大巨星 —

宇垣一成が「政界の惑星」なら近衛文麿は「政界の明星」である。廣田内閣の運命は、政治季節、議會接近と共に、行政機構改革問題を巡つて暗夜の行路に彷徨してゐる。そして若し廣田内閣が行政機構改革問題を文字通り切り抜けたとしても、支那問題の解決に至つては、必ずこれを切り抜ける事は不可能と言つてよからう。

政變來春四月説の起る所以。そして、次期政權の擔當者下馬評に花が咲く！ 宇垣一成と近衛文麿こそ次期政權の擔當者と目すが、果して宇垣か？ 近衛か？ この巨點を突いた本書は筆者來間恭氏の筆陣に餘すところがない！！

發行所

東京市芝區田村町三〇
振替東京九〇七七番

第 百 書 房

第百書房刊行書目録 (定價各十錢) (送料二錢)

辰野 九紫著 萬引一代女	乾信一郎著 二・二六事件の惑星 北一輝と西田稅
濱本 浩著 戀の決死隊	大平進一著 戰爭はいつか
中村 正當著 歳末遺線譚	宇佐美 謙著 東京オリムピック 大會を目指す金儲け
東京毎日夕刊編輯局編 女の日記	青山 謙介著 文部大臣 平生夙三郎とどんな男か
森 轟起著 私の事業哲學	靜木 恒夫著 小林一三と大谷竹次郎
柑住 桐郎著 徳田榮子の手記	太田 宇之助著 新支那を説く
東京毎日夕刊編輯局編 惚れた話	内田 健次郎著 久原房之助と石原廣一郎
安藤 盛著 セレパス島女風景	來 間 恭著 次期政權を目指す 宇垣一成と近衛文麿
東條 貫太郎著 スパイ禍の日本	上田 英三著 國鐵疑獄の全貌
坂川 辰馬編 二・二六事件斷罪記録	松本 忠雄著 宿命に立つ日支關係

買 十 錢 (送料二錢)

トツレフンパ物讀！適好に長夜

いさ下み込申御てに替振は又手切に接直房書本

辰野九紫著	萬引一代女	價四六判・四十六頁 送料二錢
濱本浩著	戀の決死隊	價四六判・四十六頁 送料二錢
中村正常著	歳末遣繰譚	價四六判・四十六頁 送料二錢
東京毎日新編輯局編	女の日記	價四六判・四十八頁 送料三錢
相住桐郎著	徳田榮子の手記	價四六判・四十六頁 送料二錢
東京毎日新編輯局編	惚れられた話	價四六判・五十二頁 送料三錢
安藤盛著	セレベス島女風景	價四六判・四十四頁 送料二錢
東條貞太郎著	スバイ禍の日本	價四六判・四十六頁 送料二錢

房書百第

〇三町村田區芝市京東
番七七〇九京東替振

トツレフンパの中賣發・讚絶下目

内田健次郎著

四六判・四十八頁 定價十錢 (送料二錢)

久原房之助と石原廣一郎

政界の惑星・久原房之助！財界に新らしい巨歩を踏み出して、其の惑星的存在が、云爲せられるに至つた南洋の開拓者石原廣一郎！彼等は一體どんな人物か？

本書は之等二人の怪物を拉し來つて、彼等の人物論と、彼等の動靜を描き出した興味津々たる讀物である。出版前既に熱狂的申込み殺倒、目下飛ぶ様に賣れてゐる最近パンフレット界のヒットである。

房書百第

〇三町村田區芝市京東
番七七〇九京東替振

好評！時局と人物のパンフレット

全各驛ホ・スムダドンにあり。品切の節は本書房直に接

坂本辰馬編 二・二六事件斷罪記録 新刊 十錢・送料二錢	乾信一郎著 二・二六事件の惑星 北一輝と西田税 新刊 十錢・送料二錢	青山謙介著 文部大臣 平生釵三郎 新刊 十錢・送料二錢	静木恒夫著 小林一三と大谷竹次郎 新刊 十錢・送料二錢	内田健次郎著 久原房之助と石原廣一郎 最新刊 十錢・送料二錢	大手進一著 戦争はいつか 新刊 十錢・送料二錢	太田宇之助著 新支那を説く 最新刊 十錢・送料二錢	上田英三著 國獄疑獄の全貌 最新刊 十錢・送料二錢
-----------------------------------	---	--------------------------------------	-----------------------------------	--------------------------------------	-------------------------------	---------------------------------	---------------------------------

東京市芝田區三町〇番 振替東京九〇七七番 第百書房

東京朝日新聞
東亞問題調査會

太田宇之助著

定價 十錢 (送料二錢)

新支那を説く

(目下發發中)

— 起ち上る支那の現状 —

日支紛争は未だ解決されない。そして抗日テロ事件は單なる日支衝突の一現象ではない。新しい、統一されんとする支那は今何を考へ何をなさんとしてゐる？ 支那の獨裁者蔣介石の經濟的建設の實績、支那國民生活の現状、これ等支那の眞實の姿を把握しなければならぬ立場に、今、日本は立つてゐるのだ。支那の眞の姿を認識してこそ、始めて、日支の解決點は自づと見出される。

眞摯な支那研究家太田宇之助氏が、これ等の立場に立つてハッキリと支那の姿を紹介されたのが本書である。政治家も、軍人も、大衆も此の際是非一讀すべき貴重なる「支那解剖」の文献である。即刻求められよ！

發行所

東京市芝田區田村町三〇
振替東京九〇七七番

第百書房

330
630

森田醫學博士推獎

強腦強精 滋養強壯



オオコンリオン

何が彼氏をさうさせたか？ 強精！ 健康！

オオコンリオンは強力ホルモンと強力ビタミンA Dとの総合による最新の製品にして、殊にビタミンの含有量は最上位である。實に本劑一粒は、鷄卵十五個、牛乳三升、普通鱈肝油三十瓦のVA含有量に匹敵する偉力を持つてゐる。しかも本劑は日本の土壌と常食物との缺陷を研究して作られた理想的營養劑として、各方面から「なる程これだ！ 心から求めてゐた薬はこれだ！」と喜ばれて眞實に効目が實証されました。左の症狀のある方は勇敢に試用あれ、必ず其効目が判ります。

機能衰退。早老。中老。初老現象。動脈硬化。血壓亢進。視力衰退。虛弱體質。神經衰弱。頭痛症。ヒステリー症。肺結核。肋膜炎。肺炎カタル。慢性氣管支炎。病後の衰弱。貧血症。陰萎。不感症。性慾減退。身體がグレイ。何となく弱い人には、必ず効目が分る。

◇定價 壹圓五十錢（四五粒入）三圓（百粒入）八圓五十錢（三百粒入）十三圓（五百粒入）

發賣元 東京市芝區田村町四の十八 今日の問題社
總發東京五九七四八番

小ま。資料不要。試薬文獻二編切手三枚お送りの方に無代進呈します。

19/5